

雲が地上に落す影、遠寺の塔、水流の屈曲等も遠近を助くべしと雖も、此等は只だ附加に過ぎざれば、草などこまでも充分に書き現はすべし。

直ぐ近き處にある物の色を現はすは容易にして生物寫生を爲すに同じ、例へば木の枝を花瓶に挿して畫くは困難ならざれども、若し此木が稍や遠方に生へて居るとなると中々容易には畫けぬものなり。

近景の草を畫くには全體の色は綠なれども、其中には種類や色の相違もあれば其感じを現はさざる可からず、故に葉一枚々々を畫くの要なしとも、此趣を表はす爲めに種々なる綠色を配合せざる可からず。

色は混ぜずに其儘を一々直接に畫面に着け、又全體に色の寒き感じあれば暖色を點綴し、鼠色過ぐる時はカドミウム或はオキサイド、オゾ、クロミウムの如き類を附加すべし、遠景は平らに畫き調子も鼠色を多くす、草は地面より上の方に向ひ生へたるものなれども、其通りに筆を縦に用ゆるの要なし、或部分は縦に畫く處もあれども、又た横に畫く處もあり、又た草花等を畫添へて大に趣を助くるものとす、此の如くして草を畫かば能く自然の趣を現はすことを得べきなり。

花の着いてゐる草は、何色を問はず、必ず花のある部を塗り殘し、あとにて花の色を紙の地に施し、草の色を以て花の形を現はすので、かくすると、花の美彩を保つのである、微小の物を除くの外、ホワイトを使用せぬ方がよい。又花が多く集まつて咲いてゐるのは、花を先に描いて、草の色を後から施すか、又は同時に描くのである、眼より遠いものは、色と濃淡とを示せば、草に見える。それから、萌え出づる春草、焼け野の春草、苔等は色と濃淡とのみを着ければいいのである、又蔓草なども濃淡と色とに深く注意して描くのである（丸山晚霞氏女性と趣味）